

〈論文〉

中国語訳『奥の細道』の比較研究 (2)

田中幹子・鄭寅瓏

はじめに

昨年、中国語訳『奥の細道』の比較研究を発表した<sup>(注1)</sup>。本稿はその続きである。前回と同様に現在中山大学外国語学院博士研究員鄭寅瓏氏に中国語の翻訳をお願いした。『奥の細道』原文は(1)と同様日本古典文学新全集『松尾芭蕉集』2「紀行・日記編」を使用する。

【原文】

〔二〕

弥生も末の七日、明ほの、空朧々として、月ハ有あけにてひかりおさまれる物から、富士の峯幽に見えて、上野・谷中の花の梢、又いつかはと心ほそし。むつまじきかぎり霄よりつどひて、舟に乗りて送る。千じゆと云所にて船をあがれば、前途三千里のおもひ胸にふさがりて、幻のちまたに離別の泪をそゝぐ。

行春や鳥啼魚の目ハ泪

是を矢立の初として、行道猶すゝまず。人々は途中に立ならびて、後かげのミゆるまでハと見送るなるべし。

①張香山訳『奥州小道』（『日本文学』季刊，1987年第二期）

三月<sup>①</sup>二十七日、黎明天色朦朧、晓月已消失了光辉、能隐约地看到富士山。想到不知何时才能重赏上野、谷中的櫻花枝梢、而感到凄凉。昨晚，所有亲友都聚在一起，今朝搭船送行，至千住弃舟登陆。想着前程三千里，心中充满悲哀。在短暂的人生的相别路口，流下了离别之泪。

春去也，

鸟啼，鱼的眼里浮着泪花。

已咏出旅行中の第一首俳句、可是尽朝着去路而行于不前。亲友们排列在途中，将直到看不见我的背影为止而为我送行呢！

注释：

①三月：系阴历。以下文中所有月份，都是阴历。

〈張香山訳の日本語訳〉

三月<sup>①</sup>二十七日、明け方の空模様はほんやりとしていて、有明の月はすでに輝きが消えて、富士山は微かに見える。いつ再び上野、谷中の桜の梢を見ることができるとかと思うと、物寂しく感じてきた。昨夜、すべての親戚や友人が集まり、今朝舟に乗って見送ってくれて、千住に着くと、舟を捨てて上陸した。前途三千里を思うと、心は悲しみに満ちた。短い人生の中での人との分かれ道で、別れの涙を流した。

春は去るのだ。

鳥は鳴き、魚の目には涙を浮かべている。

旅の最初の俳句はすでに詠み出したが、行く道に向けて躊躇って前に進まない。親戚や友人達は道の中で並んで、私の後ろ姿が見えなくなるまで私を見送ってくれるだろう。

注釈：

①三月：旧暦である。以下の文章でのすべての月はみな旧暦である。

②陳岩訳『奥州小路』（訳林出版社、2011年2月）

（陳岩氏は日本語の原文を挙げながら、原文に中国語の注をつけて、さらに中国語訳を付ける形で訳している。）

## 二、旅立ち

弥生<sup>①</sup>も末の七日、明ぼの空朧々として、月は在明にて光おさまれる物から、不二の峯幽にみえて、上野・谷中<sup>②</sup>の花の梢、又いつかはと心ほそし。むつまじきかぎりは宵よりつどひて、舟に乗て送る。千じゅ<sup>③</sup>と云所にて船を上がれば、前途三千里<sup>④</sup>のおもひ胸にふさがりて、幻のちまたに離別の涙をそそぐ。

行く春や鳥啼魚の目は泪

是を矢立の初として行く道なを進まず。人々は途中に立ならびて、後かげのみゆる迄はと見送なるべし。

[注解]

- ① 阴历三月。本文中所有月份，都为阴历。
- ② 上野，谷中均为现东京都台东地名，古来就是樱花胜地。
- ③ 千住：今东京都足立区千住町。为当时奥州道及日光道头一个驿站。
- ④ “三千里”为汉诗文中常用说法。

二，启程

农历三月二十七日拂晓，天色朦胧，残月光微。远处富士之峰若现若隐，眼前上野，谷中樱树枝梢清晰可见。观此令人心绪不宁，真不知何日才能重睹这远山近樱。昨夜，亲朋旧故尽聚，今晨一起登舟相送。行至千住，舍舟登岸，念及前程遥遥，感慨万端，虽悉知人生不过如梦幻，但一旦别离，仍止不住泪水长流。

一春又将去  
游鱼目含汪汪泪  
鸟啼声凄凄

此句作为行吟开篇，就道前行，但离情萦怀，步履滞重。亲友们该正列于道中目送，直至望断吾等身影。

〈陳岩訳の日本語訳〉

[注解]

- ①旧曆三月。本文の中で用いられたすべての月は旧曆である。
- ②上野，谷中は現在東京都台東の地名であり，古くから桜の名所である。
- ③千住：現東京東京都足立区千住町。当時では奥州道と日光道の最初の宿場である。
- ④「三千里」とは漢詩文の中でよく使われた言い方言い回しである。

二，旅立ち

旧曆の三月二十七日の暁，空模様はほんやりとしていて，残月の光は微かである。遠くの富士の峯は見えつ隠れつしていて，目の前の上野，谷中の櫻の梢はくっきり見える。これを見ると，気が漫ろで落ち着かなくなり，この遠くの山と目の前の桜を再び見るのはいつになるのだろうか。昨夜，親戚や友人のみんなが集まり，今朝は一緒に船に乗って見送ってくれた。千住に着くと，船を捨てて岸に上陸した。これから先

の道が長いことを思うと、千万無量の思いをし、人生はたかが幻のようなものであると知っているが、一旦離別となると、やはり涙がとめどなく流れる。

一つの春はまた去っていくのだ  
泳ぐ魚は目に涙を浮かべている。  
鳥は鳴き声が悲しくて痛ましい。

この句を紀行文の冒頭として、途につきながら前に進む。ただし、別れの気持ちは心にまつわっているので、歩みが重く感じる。親戚や友人達は道の中で並んで、我等の姿が見えなくなるまで見届けてくれているはずである。

③鄭民欽『奥州小路』（河北教育出版社，2002年6月）

启程

阴历三月二十七日，晓天朦胧，残月余辉，富士山峰隐约可见。念及此行不知何时重睹上野，谷中<sup>①</sup>之垂梢樱花，不禁黯然神伤。挚友皆于前夕会聚，且登舟相送至千住<sup>②</sup>上岸，此去前途三千里<sup>③</sup>，思之抑郁凄楚，且向虚幻之世一洒离别之泪。

匆匆春将归，  
鸟啼鱼落泪。

权以此句为纪行之首句，依然趑趄不前。众人伫列路上，似欲相送至不见余之身影。

①上野，谷中，皆为江戸赏花胜地。今东京都台东区内。

②奥州道の第一个驿站。今东京都足立区内。

③《东关纪行》：“李陵入胡，三千里道之感。”

〈鄭民欽訳の現代語訳〉

旅立ち

旧曆の三月二十七日，曉の空はぼんやりとしていて，残月は微かに光っていて富士山の峰がぼうっと見える。今回行ったら再び上野，谷中<sup>①</sup>の枝垂桜を見るのはいつになるかと思うと，落ち込み悲しんでしまう。親友は皆前夜一堂に集まり，そして舟に乗って，千住<sup>②</sup>で岸に上陸するまで見送ってくれた。ここから行くと前途三千里<sup>③</sup>と

なり、思うと気がふさぎ、痛ましく感じる。ひとまず幻の世に別れの涙を溢した。

そそくさと春は帰ってしまう。

鳥は鳴き、魚は涙を流す。

とりあえずこの句を紀行の始まりの句としておこうが、相変わらず躊躇して前に進まない。みんなが道で佇んで並んで、私の姿が見えなくなるまで見送ろうとしているようである。

①上野、谷中は皆江戸の花見の名所である。今の東京都台東区の中にある。

②奥州道の最初の宿場である。今の東京都足立区の中にある。

③『東関紀行』：「李陵入胡，三千里道之感」。

④陳徳文『奥州小道』（『松尾芭蕉散文』作家出版社，2008年9月）

(二)

三月下旬之七日，黎明的天空烟霞迷离，残月淡影，富士山微微可见。附近上野，谷中の櫻花何时再得一见？想来惆怅不已。亲朋故旧星夜齐集送行，乘舟同抵千住后，舍舟登岸。征途三千里，渺渺在一心。人生如梦，感慨万端，前程未卜，洒泪作别。

春去鸟空啼，鱼眼浮泪滴。

权以此句作为出行的首句，然而依旧去意徘徊，且行且止。

人们排列途中相送，看来要直到望不见我的背影才会回去吧。

〈陳徳文訳の日本語訳〉

(二)

三月下旬の七日，夜明けの空は煙霞でぼんやりしていて，残月は淡い影が映り，富士山は微かに見える。近くの上野，谷中の桜はいつまた見えるのだろうか。そう思うと憂いを感じてやまなくなる。親戚や友人などの古い知り合いが星のある夜に一斉に集まって見送ってくれた。一緒に舟に乗って千住まできた後，舟を捨てて岸に上陸した。道のりは三千里であり，その渺渺たる風景は一心にある。人生は夢の如し。感慨無量となり，前途は予測できず，涙を溢して別れをする。

春が去って，鳥は空しく啼く。

魚の目には涙を浮かべている。

とりあえずこの句を旅立ちの最初の句とする。しかし、行く決心は相変わらずつきかねて、ぐずぐずしていた。

人々は道の中で並んで見送ってくれた。私の後ろ姿が見えなくなるまで見届けてくれるようだ。

⑤鄭茂清『奥之細道』（聯経出版社，2011年1月）

二、啟程

彌生下句之七日<sup>①</sup>，曙色朦朧中，殘月微茫下，不二峰隱約可望<sup>②</sup>，然上野，谷中之花梢<sup>③</sup>，何時重見，思之愴然<sup>④</sup>。知交而睦者<sup>⑤</sup>，昨宵即來相聚，今晨乘舟相送。至名為千住之處<sup>⑥</sup>，棄船上岸。遙想前途三千里<sup>⑦</sup>，胸口為之鬱塞。浮生夢幻耳，奈何而灑離別之淚<sup>⑧</sup>。

春將去也

枉教烏啼婉轉

魚目含淚<sup>⑨</sup>

且以此句為此行之破題<sup>⑩</sup>，唯上路而踟躕不前。眾人並肩立於路上，蓋欲目送至背影隱沒而後已。

①即陰曆三月二十七日（陽曆五月十六日），季節屬晚春，故有「春將去也」之句。日人雅稱陰曆三月為彌生。其他月份別名之常見者有：睦月（正），如月（二），卯月（四），皋月（五），水無月（六），文月（七），葉月（八），長月（九），神無月（十），霜月（十一），師走（十二）。

②《源氏物語·帚木》：「殘月微茫，輪廓隱約，曙色朦朧，反多情趣。」「不二」即「富士」，或作「富峴」，讀音同（ふじ）。日本第一高山，海拔三七七六公尺，文人或稱「富岳」，在古駿河國，跨越今靜岡，山梨兩縣。天晴時，即遠在江戶，亦可望其雪峰。日人仰為神山或仙山。和文與漢文文學中多有吟詠此山之作。如都良香（八三四？-八七九）〈富士山記〉：「蓋神仙之所遊萃也。」又云：「山有神，名淺間大神。」漢詩有石川丈山（一五八三-一六七二）〈富士山〉：「仙客來遊雲外巔，神龍棲老洞中淵。雪如紈素煙如柄，柏扇倒懸東海天。」大田南畝（一七四九-一八二三）〈望岳〉：「日出扶桑海氣重，青天白雪秀芙蓉。誰知五岳三山外，別有東方不二峰。」等，皆膾炙人口。明清之際，華人亦有詠富士者，詳廖肇亨，〈木菴禪師詩歌中的日本圖像：以富士山與僧侶像讚為中心〉，氏著《中邊·詩禪

・夢戯》收（台北：允晨，二〇〇八）。

③「花梢」謂櫻花樹梢。「上野」，「谷中」毗連，皆台地，今屬東京都台東區。上野有上野公園，谷中在其西北。從上野寬永寺至谷中感應寺一帶為賞櫻勝地，江戸時代已然。芭蕉有句題〈草庵〉云：「花雲一片 鐘聲來自上野 還是淺草」（花の雲 鐘は上野か 浅草か）。

④平安時代晚期漂泊歌僧西行上人將行腳四國，臨行作歌，有句云：「何時能重見，思之徒愴然」（又いつかはと 思う哀れに）（《山家集》）。

⑤指衫風，其角，嵐雪等人，皆芭蕉門下。

⑥「千住」，今東京都足立區千住，江戸時代通往日光及奥州街道第一驛站。芭蕉一行取水路，從深川附近之渡口，沿隅田川溯流而上，在千住下船，開始徒步（偶亦騎馬）之旅。

⑦陸機（二六一 - 三〇三），〈為顧彥先生贈婦二首〉之一：「辭家遠行遊，悠悠三千里。」李白，「思邊」：「玉關此去三千里，欲寄音書那得人。」白居易，〈冬至宿楊梅館〉：「十一月中長至夜，三千里外遠行聞。」其實芭蕉之《細道》全程約六百日里（約兩千五百公里），其所以套用古詩文「三千里」一詞，蓋欲強調此次遠行之遠。在其他和文文學作品中以有援用此詞組之例，如《源氏物語・須磨》：「遙望來處山霞，誠有三千里外之思。」

⑧蘇軾，〈罷徐州往南京馬上走筆……〉：「別離隨處有，悲惱緣愛結。而我本無恩，此涕誰為設。」

⑨原文「行春や 鳥啼魚の 目の泪」句意：「春去也，鳥啼魚目淚。」案：此句中七下五「鳥啼魚目淚」，似與下列文本有涉。樂府〈古辭〉：「枯魚過河泣，何時悔復及。」杜甫，〈春望〉：「感時花濺淚，恨別鳥驚心。」李賀（七九〇 - 八一六），〈題歸夢〉：「勞勞一寸心，燈光照魚目。」東晉干寶，《搜神記》，卷十二：「南海之外有鮫人，水居如魚，不廢織績，其眼泣則能出珠。」

⑩「破題」，原文「矢立の初」，謂紀行或遊記之開頭。案：「矢立」（やたて），指羈旅攜帶之成套書寫用具。墨壺與筆盒相連。墨壺扁斗狀，以絲綿蓄存墨汁；筆盒柄形，如今之筷子匣，可置毛筆。

〈鄭茂清訳の日本語訳〉

二、旅立ち

弥生下句の七日<sup>①</sup>，朦朧としている曙の景色中，おぼろである残月のもとでは，不二の峯が微かに見える<sup>②</sup>。然れど，いつまた上野，谷中の花の梢<sup>③</sup>が見えるかとおもうと，悲嘆にくれてしまう<sup>④</sup>。知り合いで睦じい者<sup>⑤</sup>は，昨夜直ちに集まってきて，今朝舟に乗って送ってくれた。千住というところに着くと<sup>⑥</sup>，舟を捨てて岸に上陸した。前途三千里<sup>⑦</sup>に思いを馳せると，胸が塞がってしまう。浮き世は夢と幻である。どうしようもなく別れの涙を零した<sup>⑧</sup>。

春は去ろうとしているのだ。

鳥のなめらかで美しい鳴き声はむだになる。

魚の目には涙を浮かべる<sup>⑨</sup>。

とりあえずこの句をこの旅の書き出し<sup>⑩</sup>とする。ただ旅に出ているが躊躇して前に進まない。みんな肩を並べて道の中で立ち、後ろ姿が消えるまで見届けようとしているからである。

①即ち旧暦の三月二十七日（新暦五月十六日）、季節は晩春であるゆえ、「春は去ろうとしているのである」という句がある。日本人は旧暦の三月を弥生と雅称している。他の月の別名によくあるものは：睦月（正）、如月（二）、卯月（四）、皐月（五）、水無月（六）、文月（七）、葉月（八）、長月（九）、神無月（十）、霜月（十一）、師走（十二）。

②『源氏物語・帚木』：「残月は微かに光り、その輪郭がほんやりしていて、あけぼほの色は朦朧として、かえて趣きに富むこと。」「不二」即ち「富士」であり、或いは「富峴」とする。読み方は同じく（ふじ）である。日本では最も高い山であり、海拔は三七七六メートルで、文化人は「富岳」とも呼ぶ。旧駿河国にあり、今の静岡、山梨両県を越える。晴れる時は、遠い江戸にいても、その雪の峰を眺めることができる。神山や仙山として日本人に崇められている。和文と漢文の文学にはこの山を詠う作品が多くある。例えば、都良香（八三四？ - 八七九）『富士山記』に「蓋神仙之所遊萃也。」とあり、また「山有神、名浅間大神。」とある。漢詩としては、石川丈山（一五八三 - 一六七二）『富士山』の「仙客来遊雲外巔、神龍棲老洞中淵。雪如紈素煙如柄、柏扇倒懸東海天。」や大田南畝（一七四九 - 一八二三）『望岳』の「日出扶桑海氣重、青天白雪秀芙蓉。誰知五岳三山外、別有東方不二峰。」などがあり、すべて人口に膾炙していた。明と清の時、華人にも富士を詠う者がおり、詳しくは廖肇亨の「木菴禪師詩歌中的日本圖像：以富士山與僧侶像讚為中心」を参照し、氏が著作した『中邊・詩禪・夢戲』という本に収められている（台北：允晨，二〇〇八）。

③「花梢」とはいわゆる桜花の梢である。「上野」「谷中」は隣り合っていて、今は東京都台東区に属する。上野には上野公園がある。谷中はその西北にある。上野の寛永寺から谷中の感応寺のあたりまでは花見の名所であり、江戸時代ではすでにそうだったのである。芭蕉の句題「草庵」には「一面の花の雲 鐘声は上野から来たのか それとも浅草か」（花の雲 鐘は上野か 浅草か）がある。

④平安時代晩期の漂泊歌僧西行上人は四国に行脚しようとした時、行く直前は歌を

作った。「いつまた見れるだろうか、思うと空しく悲嘆にくれてしまう」(又いつかはと 思う哀れに) (『山家集』)。

⑤衫風, 其角, 嵐雪などの人を指す。皆芭蕉の門下である。

⑥「千住」, 今東京都足立区の千住であり, 江戸時代では日光と奥州街道に通じる最初の宿場である。芭蕉一行は船で行って, 深川近くの渡し場より, 隅田川に沿って上流へ遡り, 千住で船を降りて, 徒歩(たまには騎馬する)の旅を始めた。

⑦陸機(二六一-三〇三)『為顧彦先生贈婦二首』の一に「辭家遠行遊, 悠悠三千里。」とある。李白の『思辺』に「玉関此去三千里, 欲寄音書那得聞。』, 白居易の『冬至宿楊梅館』に「十一月中長至夜, 三千里外遠行人。」とある。実は芭蕉の『細道』の全行程は約六百里(約二千五百メートル)あり, 古い詩文の「三千里」という言葉を踏まえるのは, 今回の旅の遠さを強調したいからである。他の和文の文学作品の中でもこの言葉を援用する例が見られ, 例えば『源氏物語・須磨』の「来し方の山は霞はるかにて, まことに「三千里の外」の心地するに」。

⑧蘇軾の『罷徐州往南京馬上走筆……』に「別離隨處有, 悲惱緣愛結。而我本無恩, 此涕誰為設。」とある。

⑨原文「行春や 鳥啼魚の 目の涙」。句意:「春は去こうとしているのである。鳥は鳴き, 魚の目には涙。」思うことには, この句の中七下五の「鳥啼魚の目の涙」は以下の文章と関係がありそうである。楽府『古辞』の「枯魚過河泣, 何時悔復及。』, 杜甫『春望』の「感時花濺淚, 恨別鳥驚心。』, 李賀(七九〇-八一六)『題婦夢』の「勞勞一寸心, 燈光照魚目。』, 東晋干宝『搜神記』卷十二の「南海之外有鮫人, 水居如魚, 不廢織績, 其眼泣則能出珠。」である。

⑩「破題」, 原文では「矢立の初」といい, 紀行あるいは旅行記の冒頭とのことである。思うことには, 「矢立」(やたて)は鞆旅の時に携帯用の書道用具のセットを指すのである。墨壺と筆入れはつながっている。墨壺はキセルの形をしていて, 真綿で墨液を蓄える。筆入れは細長い形をしていて, 今の箸箱のようで, 筆を置くことができる。

## 二 各訳分析

前回の論文<sup>(註2)</sup>と同じく今回の原文を6つに区分けする。(1) 弥生も末の七日, 明ばの、空朧々として, 月ハ有あけにてひかりおさまれる物から, 富士の峯幽に見えて, 上野・谷中の花の梢, 又いつかはと心ぼそし。(2) むつましきかぎり霄よりつどひて, 舟に乗りて送る。(3) 千じゆと云所にて船をあがれば, 前途三千里のおもひ胸にふさがりて, 幻のちまたに離別の泪をそゝぐ。(4) 行春や鳥啼魚の目ハ泪。(5) 是を矢立の初として,

行道猶す、まず。(6) 人々は途中に立ならびて、後かげのミゆるまでへと見送るなるべし。

(1) 「弥生も末の七日、明ほの、空朧々として、月ハ有あけにてひかりおさまれる物から、富士の峯幽に見えて、上野・谷中の花の梢、又いつかはと心ほそし」

冒頭の「草の戸も住み替る代や雛の家」のとおり、芭蕉の出発は元禄二（1689）年の三月の節句過ぎの予定だった。それが実際は三月下旬となった。<sup>(注3)</sup> 芭蕉としては桜を塩釜で見るつもりだったが、46歳の芭蕉をまだ寒い北国に向かわせるのを弟子たちが懸念して出発が遅れたと言われている。<sup>(注4)</sup> 太陽暦では5月16日に当り、春の終わりというより初夏の陽気の出発であった。この部分は紀行文全体の冒頭として構えた序文に対して、実質的な出発の場面と言える。芭蕉は出発の送れを逆手に取り、春の別れと自分達の旅たちを意識的に重ねてこの章を綴っている。（芭蕉自筆本では「弥生も末の七日、元禄二とせにや」となっており、この章を実質的な出発日の書き出しという意識があることがうかがわれる。）「月ハ有あけにてひかりおさまれる物から」の部分に関しては⑤鄭茂清『奥之細道』では『源氏物語・帚木』：「残月は微かに光り、その輪郭がぼんやりしていて、あけぼのの色は朦朧として、かえて趣きに富むこと。」<sup>(注5)</sup> 桜も散った時期に、「富士」と「桜」があげてあるのは芭蕉の自然な感情というよりも意図的なものであろう。富士と桜という日本を象徴するものを挙げることで異国の地に行くような気構えを込めたと思われる。富士によせる日本人の思いの特性について⑤鄭茂清『奥之細道』では「旧駿河国にあり、今の静岡、山梨両県を越える。晴れる時は、遠い江戸にいても、その雪の峰を眺めることができる。神山や仙山として日本人に崇められている。和文と漢文の文学にはこの山を詠う作品が多くある。」とし都良香の『富士山記』や石川丈山の『富士山』の漢詩などを紹介した他、「明と清の時、華人にも富士を詠う者がおり、詳しくは廖肇亨の「木菴禪師詩歌中的日本圖像：以富士山與僧侶像讚為中心」を参照し、氏が著作した『中邊・詩禪・夢戯』という本に収めている。<sup>(注6)</sup> 桜に関して中国語訳のうち上野・谷中が桜の名所であることを指摘しているのは、②陳岩訳『奥州小路』③鄭民欽『奥州小路』⑤鄭茂清『奥之細道』である。但し、②陳岩訳『奥州小路』の「目の前の上野、谷中の櫻の梢はくっきり見える。」は、誤った解釈である。出発日は、太陽暦5月16日で桜はとうに散っており、芭蕉の見ているのは空想中の桜である。「遠くの富士の峯は見えつ隠れつしていて」との「遠く」と「目の前」という対象を意識したあまりの誤訳であろう。また③鄭民欽『奥州小路』では谷中の「枝垂れ桜」と限定している。谷中の長明寺の枝垂れ桜は著名であり、それを意識したものかと思われる。⑤鄭茂清『奥之細道』は「上野の寛永寺から谷中の感応寺のあたりまでは花見の名所であり、江戸時代ではすでにそうだったのである。」とあり、さらに芭蕉

の「花の雲鐘は上野か浅草か」『続虚栗』を紹介している。この章の要は、いよいよ出発という段になって、芭蕉は江戸の名所である富士と桜に想いを馳せるという点である。

(2) 「むつましきかぎり霄よりつどひて、舟に乗りて送る」

「むつましき限り」について⑤鄭茂清『奥之細道』では注に「衫風、其角、嵐雪などの人を指す。皆芭蕉の門下である。」と具体的な人名があがっている。但し、杉風は芭蕉に住処を提供し、曾良が『奥の細道』に芭蕉に従ったことは各中国語訳すべて注などで指摘されてはいない。

(3) 「千じゆと云所にて船をあがれば、前途三千里のおもひ胸にふさがりて、幻のちまたに離別の泪をそゝぐ」

「千住といふ所」は現在の千住大橋付近と見られるが、橋のどちら側かは明らかでないため北岸の足立区と南岸の荒川区が、「芭蕉旅立ちの地」をめぐる争っている。足立区側は、出発の前に手紙を出す「飛脚問屋」などが北岸にあったこと、一方の荒川区側は当時の江戸は隅田川の南岸までを指したことを主張している。<sup>(注7)</sup> 新日本古典文学全集本の頭注では「千住は日光街道最初の宿駅。いま東京都足立区のうち」とあり②陳岩訳『奥州小路』③鄭民欽『奥州小路』④鄭民欽『奥州小路』が足立区と解説している。②陳岩訳『奥州小路』の注では「現東京都足立区千住町。当時では奥州道と日光道の最初の宿場である。」とあり、ほぼ同じ注である。おそらく日本古典文学全集の注を訳したと思われる<sup>(注8)</sup> 「前途三千里のおもひ胸にふさがりて」に対して①張香山訳『奥州小道』「前途三千里を思うと、心は悲しみに満ちた。」②陳岩訳『奥州小路』は注で「「三千里」とは漢詩文の中でよく使われた言い方言い回しである。」としており、そのために訳文では「三千里」を用いず「これから先の道が長いことを思うと、千万無量の思いをし」としている。③鄭民欽『奥州小路』「ここから行くと前途三千里となり、思うと気がふさぎ、痛ましく感じる。」④陳徳文『奥州小道』では「三千里」の前途を「渺渺たる風景」と思いやっている。「道のりは三千里であり、その渺渺たる風景は一心にある。」⑤鄭茂清『奥之細道』「前途三千里⑦に思いを馳せると、胸が塞がってしまう。」東北までの遙か彼方を三千里と称しているので訳としては問題ない。「幻のちまたに」とは「幻のようにはかないこの世の分かれ道。」の意味であり、①張香山訳『奥州小道』「短い人生の中で人との分かれ道で」「はかなさ」の説明がやや不足か。一方②陳岩訳『奥州小路』の「人生はたかが幻のようなものであると知っているが」や③鄭民欽『奥州小路』「ひとまず幻の世に」は⑤鄭茂清『奥之細道』「浮き世は夢と幻である。」は「別れ道」の意での「ちまた(巷)」を訳していない。これ

は新日本古典文学全集の「この世は夢幻と観ずるものの、しかしその幻の巷に立って」の前半部分に影響されているか。④陳徳文『奥州小道』の「人生は夢の如し。感慨無量となり、前途は予測できず」も「分かれ道」に立っているとまでは伝えきれていない。芭蕉にとってはここが本当の別れ道という意識だった。

#### (4) 「行春や鳥啼魚の目ハ泪」

「春はもう逝こうとしている。去り行く春の愁いは、無心な鳥や魚まで感ずるとみえ、鳥は悲しげになき、魚の目は涙があふれているようである」の句がこの章の中核である。各訳は概ね去りゆく春を惜しみ鳥が啼き、魚までも涙すると解釈しているが、②陳岩訳『奥州小路』「一つの春はまた去っていくのだ」の「一つ」という言葉は今行方への不安を抱えて出発する芭蕉の悲壮な思いに対して軽い。また④陳徳文『奥州小道』「春が去って、鳥は空しく啼く。魚の目には涙を浮かべている。」はすでに去った春に対して、残された鳥と魚が泣くという設定にしているが、二十七日ということを考えれば、今まさに春が去らんとしていると捉えるべきである。また⑤鄭茂清『奥之細道』は「春は去ろうとしているのだ」は妥当だが鳥は別れが悲しくて鳴いているのであり「声がむだになる」という解釈は不適。またこの訳には「鳥啼魚の目の涙」は以下の文章と関係がありそうである。楽府『古辞』の「枯魚過河泣、何時悔復及。」、杜甫『春望』の「感時花濺淚、恨別鳥驚心。」、李賀（七九〇-八一六）『題婦夢』の「勞勞一寸心、燈花照魚目。」、東晋干宝『搜神記』卷十二の「南海之外有鮫人、水居如魚、不廢織績、其眼泣則能出珠。」である」を挙げている。しかしこの句は、新聞一美氏は指摘されているように白楽天の三月尽の漢詩が影響しているといえる。<sup>(注9)</sup>むしろ芭蕉は『白氏文集』からよりも「三月尽」意識は『和漢朗詠集』の「三月尽」部から影響を受けているといえよう。<sup>(注10)</sup>

#### (5) 「是を矢立の初として、行道猶すゝまず」

歩みが進まないのは旅に行くのが恐ろしいのではなく、あくまでも別れが辛いためであり、残していく人々への心残りからである。そのニュアンスが伝わる訳としては②陳岩訳『奥州小路』の「ただし、別れの気持ちは心にまつわっているので、歩みが重く感じる」が心情を伝えている。

#### (6) 「人々は途中に立ならびて、後かげのミゆるまでハと見送るなるべし」

「人々は途中に立ち並んで我々の後ろ姿の見えるかぎりハと見送っているらしい」は各訳問題はない。

【注】

- (注1) 拙稿「中国語訳『奥の細道』の比較研究（1）」（札幌大学総合論叢第44号（2017年10月））。
- (注2) (注1) 参照
- (注3) 「猶其節余寒ありて白川のたよりに告こす人ありければ、多病心もとなしとて、弥生末つかたまで引とどめ」（杉風詠草詞書）新日本古典文学全集『松尾芭蕉集』2解説。
- (注4) 閏1月末ごろ執筆の卓袋宛芭蕉書簡に「弥生に至り、待ち侘び候塩竈の桜、松島の朧月」とある。新日本古典文学全集『松尾芭蕉集』2解説。
- (注5) この指摘は新日本古典文学全集『松尾芭蕉集』2の頭注に指摘がある。
- (注6) 注5台北：允晨，二〇〇八。」などと解説している。
- (注7) 『奥の細道，旅立ちの地は…「千住論争」25年』読売新聞2014年7月23日)
- (注8) 井本農一著『日本古典文学全集（41）松尾芭蕉集』1972年小学館
- (注9) 新聞一美氏「『奥の細道』と白居易「三月尽」」（『女子大國文』第153号。2013年9月30日京都女子大学）
- (注10) 例えば「留春春不在 春婦人寂漠 厭風風不定 風起花肅索」（『和漢朗詠集』「三月尽」50白楽天）のような句の影響を受けたと思われる。

追記 本稿は2017年度札幌大学研究助成金の成果の一つである。